



# 屍の咲く境界

---

---

諸星中央

---

一月十九日、卒業論文の口述試験が終わってしばらくの休日を何に使おうかと考えていると、呼び鈴が鳴った。電話を好ましく思ったことはないが、そのときの私は卒業が恐らく許されるだろう安堵感もあって、なんの恐れもなく受話した。親友の死の知らせだった。急に気が遠くなって私は、あせたトーンの中で情動の激しい音を聞いていた。彼を子として、信頼できる人間として扱っていた、彼の血の繋がらない父親の嗚咽を含んだ声に、はあ……はあ、それで葬儀は、と呆けた返事をした私は、電話を置いたあと、お悔やみの言葉を一切吐きだしていないことに気づいた。

暗い部屋の中でぼうと外を見つめた。雲に濡れ始めた空が広がっていた。彼なのだ、空だって泣くだろう。そう思って意識的にくそ、と声に出して腿を打った。涙はいつまで経っても出て来ない。天が彼に近いか私の方が近いか、その時は知れなかった。ただ、天はまさに泣かんとしているのに、そんなものよりよほど彼と語り合った私が泣けない。悲しいのかどうかすら不明瞭だった。きっと泣くべきなのだろう。せめて泣き声を出そうかと思ったが、声が聞こえてくることはなかった。唾のように黙った私は自分の薄情さに目眩がして床に座り込んだ。そしてその体調の変化に、私は彼が死んだことよりも自身に対する嫌悪感の方に嘆いているのだと、悲しく思った。そう思い至った今ですら、涙は出てこないではないか。

まもなく空は誰の期待を裏切ることなく泣き始めた。私のざわめきなど意に介せず、それが当然あるべき姿かのように、静かに長く、雨は続いた。

梅が咲いて桜がちりぢりになった。先年のその姿は綺麗に切り取られ、この年のような見苦しさなど微塵もない華やかな写真が彼の生家を彩っていたが、そこに居たはずの彼は姿を見せないままだった。死というものに対して、漠然とこの世から消えてなくなるような印象を持っていたが、それは間違いだった。世間の多くの人にとっては確かに彼は消えた人であったが、私や、私も知る彼の友人、彼の家族、親類、あるいは私の知らない彼の関係者にとって、彼は飛行機雲のように確かにあって、しかし掴めず、その本体は彼方に去ったまま長く尾を引いているものだった。私にとってけして鮮やかではなかった世はいよいよ烟ってくすんだ色を見せ、輝きを失った。

世間は春で、確かに輪郭は生命の季節をかたち取っていた。だが、色は一向に彩りを帯びてこない。気温は上がったのだろうか。世は賑やかになってきたのか。見えるものを無彩色に変える私の瞳は、生気を映していない。

流れる水を目で追った。故郷の、当たり前の風景だった。影が走った。水底で水草が揺らいでいる。気づけば川原には土筆が頭を覗かせており、白い蝶が舞っていた。黒くあるべきものが断りなしに見せた青色に、吐き気がして私は目を伏せた。そして今一度顔を上げると、川面は鈍く落ち込んだ影を抱いていた。錫色を戻した風景に、灰暗い満足感を得ながら、私は歩いて帰った。

草が黒々と茂っていた。風にあおられた影は、時折その中に含んだ熱気をこちらに浴びせかけてきた。熱に浮かされたように燃える生命を、私は瘴気を放つあやかしのように見ている。赤い妖気の中を水が走っていた。

彼を殺したのは何であろうか。あの鮮やかさを消し去ったのはどんな因果によるものだろうか。これからたくさんの幸福を生んでゆくはずのものを喪わせて、天は何を望んでいるのだ。淡色の世を私が生きたとて、何にもなるはずがないであろうに。影を負って私が為すことなど、実につまらないことに違いない。人情を欠いた人間など、価値のないはずだった。理想も、その理屈も、突き詰めれば情に始まっていた。

泣けなかった理由を病気に求めようとして、私は自分が人間の条件を満たしていないことに気づいてしまった。人間の根幹たる愛の欠如を。色味の失せた世は、いよいよ温度をなくしていった。

空気が張り詰めて来て、世の多くが死につつあった。人間が栄える中で、人間性を失ったものは淘汰されて行くに違いない。他の生物も障害あれば消えてゆく運命なのだ。社会性が生命活動の中枢にある人間ならば、精神を保つことが生き延びるための条件であることも道理だろう。

私の心の温度にいよいよ近づいた世は白色の中で静かに呻いていた。その呻きは不明瞭な周期の中で揺らいでいた。私は思った。秋は白く、間もなくやって来る冬は黒である。色を失って白、熱を失って黒。失ったことに目を向ければ確かにその通りであるが、どちらを失っても一方を有すると言え、それを否定するのも難しかろう。

水はいよいよ澄んで、それでいて確かに光を映している。広葉樹は最期に生命を燃やし、明暗を零していた。明暗は私を影の中に落とし、光の中に浮かび上がらせもした。

輪廻がどのような周期を持つか知らない。だが一年は廻って、彼を死に至らしめた冬がまたやって来た。冬は確かに黒色をしていた。だがそれは同時に白色であることも意味する。峰を覆う雪も冬の象徴で、確かに白色であった。そしてその中間で世は自由であった。

いつもの川縁で私はいつものように行く流れを見つめた。淡く微弱であるには違いない。だが、確かに光は照らしていた。輝く水面が目を刺すようで顔を背けると、そこには同じく薄い光に照らされた緑の草があった。それに混じって枯れ草もかつての命を語るのか、あるいは肅々と大地に還ろうとしているのか、その弾力を失った身体をびらびらと、青草とともに風に揺らしていた。その草の間を、いつもとそう変わらず見える蟻がさまよっている。

気づけばここでもかしこでも生命は平然と存在し、肅々と失われていた。春のざわめきも、夏の激しさも、秋の気落ちも、確かに生命の姿で、この草木と同じように私たち人間も存在している。けれどももいつか何のものにも冬は回ってきて、たくさんの生命が殺され、しかし同じくらいを見逃して、また春を迎える。

一年をここで傍観して、多くが死に、多くが生まれたが、なにも変わってはいなかった。誰が死のうとも、誰が生まれようとも、他に悲しむものも喜ぶものもなく、ただ落ちていくもののようにするりと生命は回っていた。彼が死んだことも、私が生きていることも、誰も何も問題にしていなかった。草木は土石と同じように佇み、生命を有しながらそのように振る舞わない。きっと動物も同じなのだ。私の足を避けてゆく蟻を見ながらそう思う。

私は一年間がなかったかのように、水渚に進んで行って足を浸した。特段の感覚はなく、脚に触れる大気と水の境目はよく分からなかった。私はぼんやりと脚を縫っていく水を眺め、そして息を吸った。かすかな春の匂いが胸に冷たくて、私はそうして久方ぶりの涙を流した。落ちた涙は川に吞まれ、静かに進む水に押され溶け込んでゆく。誰もこの川に涙が含まれているのを知ることはないのだろう。生命すら些末なこの世にあって、人ひとりの涙など。

屍の咲く境界

<http://p.booklog.jp/book/109554>

著者：諸星中央

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naka1986/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109554>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109554>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ